

目次

近代語研究の現段階	吉田 澄夫	一
近代語成立過程にみられるいわゆる分析的傾向について	田中 章夫	三
感動詞の認識	安田喜代門	七
真宗声明に於ける読唱のいろいろ	権藤 円立	四七
「候ふ」とその異形群	林田 明	五七
能狂言の擬音をめぐって	宇野 義方	七
——「鐘の音」を中心に——		
狂言における否定問いかけに答える応答詞の用法	小松 寿雄	五七
「不出戸」なる洞門抄物	金田 弘	二七
尼門跡使用の御所ことばと「蛭藻屑」	井之口有一	一三

移りゆく断定表現……………宮地 幸一……………二六

「お||ある」「お||やる」「やる」の変遷……………山崎 久之……………二九

——近世待遇語の変化の傾向——

シマス・サシマス考……………吉川 泰雄……………三五

すしとすい——近世語における酸と粹……………大橋 紀子……………三五

「お行きる」という言い方の歴史と分布……………都竹通年雄……………三四

式亭三馬の文表現——その若干の事象——……………斯林不二彦……………三六

江戸語会話文の長さ……………進藤 咲子……………三八

——浮世床・梅児誉美を資料として——

転換期の日本語——江戸から東京へ——……………杉本つとむ……………三三

江戸時代の宣伝文——とくに作家の書いた引札について——……………鶴月 洋……………三五

「です」の用法——近世語から現代語へ——……………辻村 敏樹……………四一

江戸小咄について……………池上 秋彦……………三五

江戸期方言資料としての庄内地方郷土本……………斎藤義七郎……………三六

女房詞と日葡辞書の婦人語との関係……………国田百合子……………四〇

羅尼著『和法会話対訳』について……………松村 明……………四三

近代語研究論文目録（江戸時代）……………福島 邦道……………四九

近代語研究論文目録（明治以降）……………古田 東朔……………五三

のである。

ところで今の浄瑠璃、特に義太夫は近松のものが、有名な割に少い。海音のものは全く行はれてゐない。出雲半二或は其れ以後のが多い。そこで、私が子供のとき稽古したのは勿論、大部分、大近松や海音より後のものである。さうすると、今も盛んに語られる義太夫の丸を書いた人や、ひよつとすると太夫などは、文法家のいはゆる感動詞と同じものをしつかり把握して居たに相違ないし、さつきも述べた様に、頭が悪いと言はうか、頑迷固陋と言はうか、手の付け様のない文法学者などより、はるかに確かに感動詞を把握してゐたに相違ないと思ふのである。

だが、いつ、そんなに、はつきり認識したのか、少くとも認識したことを、片仮名で表記したのか。恐らく浄瑠璃を語る太夫は、ずっと古く古浄瑠璃の時代から認識してゐたが、ただ片仮名で書分けるといふ工夫はしなかつたのでないか。さうすると、此れは、だん／＼遡って片仮名書の源流を追求するがよいといふことになる。小論文、ことに今の日本の学者では、人形も遣へず、三味線も引けず、浄瑠璃も語れずで、こちらも説明に困るが、幼稚園の子供に教へるつもりで少し説明してみよう。

四

だん／＼遡るにして、まづ近松の作品を一つ取上げよう。丹波与作待夜の小室節が適當かと思ふ。三十四歳で出世景清を出し、七十二歳で関八州警馬を出した丁度其の間、中央に近い五十六歳の作であり、其の改作が恋女房染分手綱として今も行はれてゐるのであるから、説明に都合でもある。丹波興作の上巻だけを取上げるとして、上巻は真中に道中雙六があり、その前と後とで、合計三つに切つて考へてよい、場面としては一つであるが。

ここでは、今、普通、感動詞と取扱はれてゐる単語で片仮名と平仮名と両方になつてゐる。やゝ複雑になつてくると、感動詞であるか、どうか問題になる単語もでき相である。ここでは、なるべく其の問題にふれたくない。中央の雙六

のところでは、

ヤ此この新居 サアにつ坂 ヲ、のみこんだ(舞坂三里ナ馴染のナは別)

の三つの片仮名で感動詞と見られる語で問題は無い。最初の「これ／＼御らんぜ」の「これこれ」は代名詞と見るとすれば、感動詞は全部片仮名で書いたと言へる。道中雙六の前は

平仮名

「あつ」と答へて宰領ども

片仮名

「サア御立」と催す

女中ア待たつしやれ／＼

お乳サアよいお子じゃ

姫
お乳サアよいお子じゃ

サアみんな此所へ出て

滋ア、おきや／＼

本田サアお興…

姫
お乳サアよいお子じゃ

仲居なふお乳の人様

滋ヲ、／＼よふぞ気がついた

サア三吉もこゝへこい

三吉あいつといふより慮外から

大体、普通、感動詞として取扱はれるものを列挙したのである。この外にも「ゑいやつととゑいや」とか「やれ／＼／＼……はれやれ／＼／＼」といふ様なカケ声の類もあるが、除いておいた。かう、上下に対照して見ると、語による片寄りが主であり、語の遣ひ方にも多少関係があるかも知れないといふ状態である。サアとア、とヲ、とが片仮名である。道中雙六のあとは、恋女房染分手綱の一部分として、三吉愁嘆の段といたり、重井子別れの段といたりして有名な